【付録：明星教育センター自校教育講座講演録】

明星教育センター自校教育講座
「自校史研修と自校教育の実践について」
― なぜ今、自校教育が必要か ―

東京大学・立教大学・桜美林大学 名誉教授　寺崎昌男氏

2016 年 3 月 11 日（金）

百木[※1]　それでは、明星教育センター自校教育講座を講演会を開催いたします。

はじめに、本学、高島副学長より開会のご挨拶を申し上げます。よろしくお願い申し上げます。

高島[※2]　皆さん、こんにちは。明星大学の副学長の高島でございます。DVD の中にも出てきましたが、明星大学では今から 6 年前に明星教育センターを開設いたしました。私は最初の明星教育センター長を拝命したこともありまして、自校史研究や自校教育についても若干携わってまいりました。

ここにおいでの皆さんはよくご承知だと思いますが、私立の学校というのは大学に限らず、幼稚園であろうと、どこであろうと、それぞれの学校の建学の理念、教育の目的というものがありまして、それを実現するために日々の教育活動に取り組んでいるわけです。もともと私立の学校というのはそういう趣旨で始まっておりますので、有志の方が集まって学校を設置し、教育をしていくということで、私立学校の一番基本的な規定は寄附行為となっているわけです。これはその教育理念に賛同した人が集まって、お金を出し合って学校をつくり、教育をしていく。そういう意味で寄附行為となっていると私は理解しております。

先ほども少し申し上げ、あるいは画面の中にも出てまいりましたが、明星大学は 2014 年度、創立 50 周年を迎えました。設置母体である学校法人明星学苑は、1923 年（大正 12 年）に明星実務学校という形で発足しまして、そのあと教育制度の改革に伴って旧制の明星中学、男子の中学校になり、戦後、学校法人になり、幼稚園から高校までを順次開設しまして、40 周年を記念して明星大学が 1964 年（昭和 39 年）に開学されたわけです。

そうした学校の歴史もそうですし、建学の理念や教育方針を今一度改めて研究して、それを日常の教育実践の中にどのようにいかしていくかということが、そもそもの明星教育センターの設立の趣旨でありました。一方で自校史あるいは自分の学校の教育理念等を研究し、他方でそれをいかに教育実践に反映していくかということで、体験を通しての学習という立派な教育目標が掲げていますが、私に言わせると本当の意味で大学生になる、明星大学の学生になる、自分の学生生活を、自分の将来を考えてみる。そういう機会として、約 2000 人ぐらいおります全学の新入生を 30 名程度の小人数のクラスにしまして、「自立と体験 1」というのを全学共通の初年次教育として始めるところから出発いたしました。

そのあと徐々に分担が増えてまいりまして、現在は入学前教育。これは入学する前の入学予定者に対する学習もありますし、生活もあります。それともう一つは保護者の方にも協同していただいて、自分で言うのも何ですが、入学前教育を丁寧にやっているつもりであります。

そのあと、今、お話をしました初年次教育、それからキャリア教育を担当しておりますが、6 年がたちまして、何とか学内的には明星教育センターの存在、あるいは明星教育センターの教育実践が、徐々に浸透して認知されてきたところではないかと考えております。そういうこともお含みおきいただいて、お時間があれば大学などもご覧いただけたらと思っております。

それでは、前置きはそれぐらいにしまして、寺崎先生のご講演に移りたいと思います。

お手元の資料にもあろうかと思いますし、本日お集まりの皆さまには今さら寺崎先生のご紹介は必要ないとは思いますが、東京大学・立教大学・桜美林大学、それぞれで教鞭をとられるとともに、それぞれの大学の歴史の研究を続けられまして、現在では日本の大学史研究の第一人者であられると思います。お忙しい中をわざわざお出でいただいて、ご講演いただくことに対して感謝の気持ちを表して、紹介を兼ねた前置きの前座はこのくらいで引っ込むことにしたいと思います。寺崎先生、よろしくお願いします。

百木　それでは、寺崎先生、よろしくお願い申し上げます。

寺崎[※3]　こんにちは。寺崎でございます。今、ご紹介にあずかりましたように、長年、大学の歴史を研究してまい

※1　百木英明　明星大学教育学部　教授
※2　高島秀樹　明星大学人文学部　教授
※3　寺崎昌男　東京大学・立教大学・桜美林大学　名誉教授

りました。今日は大学の歴史をつくるということと、それから自分の学校のことを学生たちに教える自校教育とこの二つのテーマでお話をしたいと思います。

はじめに、私の経歴から申し上げたいと思います。レジュメをつくりましたので、それに沿ってお話をいたします。

先ず、これまで各個別大学の歴史の執筆や編さんについて、ずいぶんいろいろ参加させてもらいました。70年代の初めに出ました『立教学院百年史』から始まって、80年代の半ばには『東京大学百年史』を完成させることができました。次に『東洋大学百年史』には学外専門家として深く参加いたしました。そしてまた、一番近いものでは『立教学院125年史』に参与いたしました。今は「150年史」がつくられておりますが、それには、私は遠慮いたしました。

そのほか、大阪の大阪女学院は新しくアーカイブズをおつくりになったところでございます。お配りした資料で見ると表紙の裏に『大阪女学院 学院教育研究センター 創刊号』というのが出ております。これでわかりますように、2012年12月にこういうセンターが発足いたしました。こういう例についても、私はつくるための相談役を買って出たわけです。

それから東京芸術大学。これはとてもすばらしい資料をお持ちのところであります。とにかく卒業生の卒業制作を並べるだけで、ともかくたいへんなアーカイブズができます。そういう芸術大学アーカイブス建設のご相談、それから拓殖大学も、立派な資料集が出ておりますがこういうところの年史をつくる作業にも参加いたしました。その結果、いろいろなことがわかりました。あとでまたまとめて申し上げます。

2番目は、自分の学校のことを学生たちに教えるという教授実践です。これをちょうど90年代の終わりに始めまして、立教大学でまず自分で試みました。それから桜美林大学に移ってから、桜美林大学の授業の中に「桜美林大学の歴史」というものを加えて話しました。それから獨協大学でここは「獨協学」という科目を毎年、新入生に開いていらっしゃいますが、そこに年間1回だけですが、教えに行きます。「日本近代私学史の中における獨協学園」という題で話をするというのが私の役目であります。それから大東文化大学では「現代社会と大学」という題で自校教育を中心としたものをなさっていらっしゃいます。去年までそのお手伝いをしていました。こういう自校教育というのがだんだんこのところ普及してきました。

この40年間、こういうことをやってきまして、その間に沿革史の編纂と自校教育というこの二つの事に投げかけられる期待や意味が非常に変わってきたのを実感いたしております。言葉を換えていうと、この二つは40年前には考えられないくらい大学にとって大事な事になってきました。以下、中身についてお話を申し上げます。

一つは、まず、自分の学校の歴史を研究することがたいへん変わってきました。

かつて私どもがこういう授業に初めて参加したころ、それは私の場合1970年代の初めですが、それから80年代にかけては、自分の大学の史料をどう取り扱ったらよいかということについて全く「無知の時期」といっていいと思います。そもそもアーカイブズという言葉をほとんど知りませんでした。ライブラリーという言葉は知っていました。それは高校、中学のころから教えられた言葉で図書館という意味だとわかっていたのですが、アーカイブズというのは当時のわれわれは聞いたこともありませんでした。

これは今と違います。「NHKアーカイブス」というのをNHKが始めました。あの辺から変わってきたのです。だから、ごく最近です。昨日もちょうど東北大震災のアーカイブズということで放送いたしておりました。ああいうふうにだんだんアーカイブズという言葉が広まってきましたが、それは最近のことです。かつては、ましてや40年ぐらい前はだれも知りませんでした。

1970年代前半に、東大で百年史をつくらなければいけないという大事業が始まったのです。ところが、そこへ集められた教員たちの専門は、私のように教育史、あとお3人が国史です。また他のお一人が建築史です。5人の教員全員が、誰1人としてアーカイブズはわかりませんでした。

ただ、私の思い出では、ときどき文学部の先生が授業の中で、「私はこの作家を研究しておりますが、イギリスへ行っ

たときにアーカイブズを見ますと、この作家の書簡がありまして、それをもとにして研究してみたところ」なんて、ちょろっと言ったの聞いたことがあるわけです。そうすると、「アーカイブズって一体何のことだろう？」と思いながらも、「日本で言うと、そうか、あの島津家文書って言っているような資料の集まりのことなのかな。そうなら島津コレクションというはずだけど、そうでもない」と思いまどう。その程度でしたね。だれにもわかりませんでした。

それよりもさかのぼること 60 年代、大学の中でアーカイブズの建設が大学の中でアーカイブズの非常に早く始まったのは同志社でした。同志社には社史編纂所というものができました。私はそれを使って報道したテレビ番組などを見て、不思議なものだと思いました。会社ではなく大学なのになぜ社史というのか。それが同志社だからだというのは、あとでやっとわかりました。あとで聞いてみると、新島襄関係文書というのが新島襄の蔵の中に入っていた。それはたいへん貴重なものだけれどもどうにも使いようがない。けれども、だんだんやっていくうちに、これはたいへんなものだとわかって、倉庫がだんだん文書庫に変わってきたというプロセスがあったのでした。今はしっかりした同志社のアーカイブズになっています。ところが、当時は違います。

早稲田は非常に豊富な第一次資料をお持ちでした。写真など、おそらく全国の大学の中で一番集まっていたのではないでしょうか。われわれもずいぶん見せてもらいました。そういうものを早稲田は大学史文書館という名前で開いていらっしゃいました。

慶應は福沢諭吉研究センターが中心のアーカイブズらしい。70 年代はまだそういう情報が断片的に入ってくるだけという時代でした。

ところが 80 年代半ば以降になってくると、だんだん様子が変わってきました。

81 年に国立公文書館法というのができて公文書館ができました。それから情報公開法が規定されました。その次に大学基準協会といういわゆる認証評価機関が生まれて、その認証評価機関による評価が生まれてきました。そういうわけで、だんだん公文書というものを集めておいて人に見せるのが重要な、公的な仕事で、その一翼を担うのが大学の役割だという意識が生まれてまいりました。

東大でも文書館をつくろう、あるいは資料センターをつくろうという声が少しずつ湧き起ってきました。先述の 5 人は、辞めるまでに数度、総長に請願をいたしました。通算二人の総長にお願いしたのですが、今でも忘れません。アーカイブズをつくろうと一生懸命頼みに行くのですが、総長ご自身がよくわからないわけです。

「センター」をつくると言ったら大事業で、東大はなにせ巨大大学ですから、そこで合意をとること自体、大変な事です。加えて、当時、学部が 10 ありましたし、附属研究所は 13 ありました。その全部のところに資料が散らばっているわけです。それを集めて、あるいはそれがわかるような所在目録をつくっておいて、それで利用する。そういうものをつくるべきだと、われわれがどんなに話をしても、あまりピンとわかってもらえませんでした。

ある総長は聞かれました。「資料、資料って先生方はおっしゃいますけど、何メートルぐらいあるんですか」と言うのです。これにはちょっと虚を突かれました。資料は、全学に広がっておりまして、施設には北海道にあるものもございます。近いところでも、原子核研究所などは田無のほうにある。そういうセンターの資料を全部合わせたら大変な量です。私どもは、「そうですね、200 メートルぐらいになるでしょうか」なんて、いい加減なことを言ったのですが、とんでもありません。本当に集めたらおそらく 23 キロメートルぐらには十分なってしまうでしょう。そんな珍問答をお互いにやるという状態でした。

ところが、われわれが辞める頃、80 年代の終わりぐらいになって、やっとアーカイブズの準備があちこちの大学でできるようになりました。そして、結局、一番大きい弾みになったのは国立大学の法人化でした。国立大学法人化は 2004 年に発足いたしましたが、このときに思い切った大学が現れるのです。その筆頭が京都大学でした。

京都大学はみごとなものでした。京大会館というのを全面改修なさって、その中の 1 階のフロア全部を中心に展示室を置かれたのです。ですから、京大の文書館は、非常に広いスペースを使って文書館を置いた、最初の旧帝国大学

です。

それにならって九州大学が置かれ、さらに東北大学はそれまでの記念館を文書館に直し、北海道大学もつくり、最近やっと最後の一つであった名古屋大学が、従来の資料センターを文書館並みの施設としておつくりになりました。その名古屋の1年前にともかく文書館というのをつくったのが東大です。われわれがいたころにあれほど言って通らなかったのが、今はたやすく通るようになりました。

その背後にあるのは何か。行政文書公開の動向でございます。行政文書を公開すべきだという公示原則が生まれてから、大学に関する情報公開が要求されるようになってきたわけです。もうこれはあとには引けないと思います。あらゆる国立大学が今、法人化しました。ですから、それぞれがつくろうと思えばつくれるという状態になってきました。あるいは、むしろつくることが重大な課題だということになってきました。

その間に生まれました重要な資料がいろいろございます。資料の1番をご覧ください。これなどは私から見ると記念すべき資料になります。すなわち大学基準協会が今行っている評価の基準の一つとして、四角で囲んだような文言が出てまいります。

「内部評価システムを適切に起動させているか」というものさしの中に、「教育研究活動のデータ･ベース化の推進」というのが出てきて、①基礎データの組織的・継続的収集と管理、②大学沿革史の編纂、③大学文書の保存と活用、というように列挙されるようになりました。

これは参考資料ですから、これらがないと認証評価に通らないということではありません。しかし、こういう文言が出るようになったというのは､私からみると40年ぶりの快挙なんですね。非常にいい判断を大学基準協会はなさったと思います。

その下の解説の中にございますが、大学の情報公開、社会に対する説明責任という言葉が出てまいりました。ですから、情報公開とアカウンタビリティ、この二つが今、大学資料の公開、および文書館の設置、出発というものを支えてくれているわけです。

Ⅱ番目は自校教育です。これは今申し上げました文書館をつくっていくとか、アーカイブズを建設するとかいうことより少し遅れて出発いたしました。

最初に私の体験から申し上げます。私が自分の学生たちに、「あなた方と私がいる大学のことについて話をする」ということを始めたのは、1997年度の春学期からでした。いきさつはいろいろありましたが、それはカットします。学生45人という非常に小さいクラスでしたが、大変熱心な、私の出した科目を選択してきた学生たちです。科目の名称は、「大学論を読む」という題にしたのです。それを採ってきた学生で、45人のうち25人ぐらいが1年生、あとの20人が2、3、4年生にわたっているという集団でした。

とてもいい学生たちでした。最初の1時間はどうして「大学論を読む」という講義をつくったか、科目をつくったか。それから2時間目3時間目は、どうやって今の大学はできたかという話をいたしました。つまり「あなたたちが高校を出て入ってきたこの大学というのは、どういう考えでつくられたのか」ということをちゃんと、きちんと教えたわけです。戦後日本の大学改革がどう行われたか。大学院や短期大学というのはどうやってできたか。特にあなた方が単位制度というので勉強しているのはなぜか。そういう話をずっといたしました。これはたいへん評判がよかったです。学生たちの好奇心が満たされた。

ところが、そのうちに、私には別の考えが浮かんだのです。それは彼らが熱心に聞いてくれれば聞いてくれるほど、何か自分は自分の言葉がむなしくなってきたのです。どういうことかというと、大学、大学と自分は言っているけれども、この子たちは今、立教の学生だ、私は立教の教授としてここにいる、こういう立教の教授としている自分が、この学生たちの前に現れて、彼らはそこの椅子に座って勉強している。けれども、お互いに一番よく知っている大学は立教大学のはずじゃないか。その立教大学のことを抜きにして、一般に「大学は」と概念的にしゃべっていていい

のだろうか。これが非常に疑問になってきました。

ですから、4 時間目から変えようと思いました。「悪いけれども、僕はこの次の週からシラバスに書いたことは全部無視する。変える。来週から 2 時間、こういう題でやりますと、黒板に「立教大学を考える」と書いたのです。来週から 2 時間これをやりますと。その通り、2 時間やりました。97 年 5 月～ 6 月ごろです。

これは冒険でした。私は生まれて初めて、今、お互いにいる大学のことを、そこにいる人間としてしゃべったのです。そうしたら、学生たちの反応がすばらしかったのです。こちらは何も言わないのに、小さな出席表にびっしり感想を書いてくるんですね。お互い初対面ですよ。科目は、全学共通カリキュラムというリベラルアーツ科目の一つですからお互いに初対面なのですが、学生たちは本当にいろいろな感想を率直に書いてきました。

ある学生は「立教は英語の立教と言われたことがあると先生はおっしゃいましたが、それは本当ですか。僕は社会学部の 3 年生です。今の英語を見ていてそんな時期があったとは到底信じられません」と書いてくるのです。それからもう一人の学生は、「私は今日先生の講義で、初めて立教と明治学院と青山学院のどこが違うのかがよくわかりました。私は国際法学科の 2 年生ですが、クラスに帰ってみんなに自慢してやりたいと思います」と。それは全部私が講義の中でしゃべったことです。別の学生は、「私は 4 年生です。就職が内定して、おそらくこれから半年後に卒業して会社に行くでしょう。でも、私は 4 年間、この大学が嫌いで嫌いでたまりませんでした。その私が先生の講義を聞いて、すごく好きになりました。卒業間際にこういう経験をさせてもらって、ありがたくお礼を申し上げます」という反応がとにかく毎回返ってきました。

次の学期の文学部総合科目となったとき、今度は 3 時間かけてしゃべりました。これも同じ反応でとてもよかった。私は初めて知りました。1 年生ではりきってここに座っている、3 年生ではゆったりと座っている、ように見えるけど、この子たちは実は立教のことについて何も知らなかったんだということです。何にも知らなかった。そして、立教についてだけではなく、よその大学についてはもっとわかっていない、ということです。

そのころ、JAR パックという言葉があり、それは上智、青山、立教。それの略です。上智について知っているかというと知りません。「上智はだれがつくったの？」と聞くと、「いや～。ミッションスクールでしょう」と言うのです。それから、「どの教派か知ってる？」というと「カトリックですか」と何とかついてきます。「そうだよ」。「カトリックのどういう会派がつくったか、知っている？」。知りませんね。「イエズス会というんだよ」。「イエズス会。聞いたことがあります」という。「いつ聞いたの」と言うと、「いや、フランシスコ・ザビエルが布教に来て、彼はイエズス会から派遣されたと書いてあったのを思い出しました」と。そういう程度なんです。やっとそこで上智というのがわかったわけです。

「立教はどこがつくったのか、知っている？」とこちらが聞きますと、「知りません」。「聖公会というのがつくったんだよ」。「聖公会ってキリスト教ですか？」と言うんですね。創価学会と間違えて、どうも一緒になるらしい。「いや、そうだよ。聖公会というのはイギリスの英国国教会の流れをくんでいる」という話をするのも、全部向こうは初耳のことなんだということがよくわかりました。びっくりしました。何も知らないでここにいる。

彼らが知っていたのは、もちろん偏差値であります。偏差値の流れの中で知っているのと、あとはブランドです。ブランドで大きいのは早稲田だと。「本当はどこに行きたかったの？」と聞くと、ほとんどの男の子の大半が「早稲田」と言う。女の子の場合はわりに「立教」に誇りを持っている人が多い。そういう点で女子学生にはとても人気があるんですね。

ですから、本当に違うんだなあと思いました。僕らは大間違いをしていたわけです。全員本意入学生だと思っていたのです。それから、みんな立教のことがわかってここに座っていると思っていたのです。違うということです。そういうことがだんだんよくわかってきて、そのとき僕は大いに教えがいがございました。

そのレジュメに書いておきましたように、97 年春学期、全学共通カリキュラム内の科目履修生たち、約 45 名。その次、

秋学期。文学部総合科目履修生の約 70 名。これは全部違う子たちです。それで、この人たちを見てびっくりしました。学生諸君はむしろたいへん驚いてくれました。先ほど申したような、それまで受けたこともない感想を僕は自分の講義で受けました。

そこで、この自校教育に関して言いますと、何が大事だったかというと、レジュメには書いておきませんでしたが、これができたのはアーカイブズが立教にあったからです。ちょうどこの講義を始める年に「立教学院 125 年史資料集」というのが出て、そこに基本資料が復刻されていました。ですから、すぐにコピーして配ることができたのです。それはとても役に立ちましたね。安心して僕はものを言うことができました。資料的安心というか裏付けを、このアーカイブズは支えてくれるのです。その支えがあって初めて非常に学問的根拠のある自校教育ができることがものすごくよくわかりました。とてもありがたかったと思います。

それでは、効果について、まず第 1 番目。自校教育をやりますと、効果は専門分野によってかなり違うということです。これは強調しておきたいと思います。例えば農学部で自校教育をやることになると、学生たちは農学の勉強と実践等を通して、地域とのつながりというのを非常に強く意識することができるようになります。もう一つはよその大学の農学部とうちの学部とはどこが違うのか。これを知ることができるようになります。もしこれから自校教育をなさろうという大学が、先生方の中にあるとすれば、学生たちが間違えなく関心を持つテーマを申し上げておきます。それは自分の大学とよその大学の比較です。

比較はレベルの比較ではございません。偏差値の比較なら彼らはわれわれよりよっぽどよく知っています。そんなことではなく、知りたいのは特色です。うちの大学や学部のどこが強いのか。よそと違うのか。今、文科省がときどき、たいへん強調している、いわゆる独自性というやつです。それを彼らは聞きたいのです。ですから、それは文学部でも同じことです。うちの英文科とよその英文科はどこが違うのか。これを知りたいのです。同じように農学部の場合でしたら、よその大学の農学部とうちの農学部はどこが大きく違うのか。それを非常によく知りたいのです。

それプラス、全学的な教育もあったほうがいいですね。ですから、自分の学部の歴史だけで自校教育はできないと思います。そうではなくて、全学の部分というのが上にないといけない。この場合、注意すべきは何か。全学的教育をやる場合、各学部長を集めて交代で講義させるなんてことをやった大学もありました。それは関西のある有名大学でしたが、駄目だったそうです。それは、一つひとつの学部長は自分の学部のことは一生懸命お話しになるけれども、お互いに相談していないでしょう。ですから、工学部長の熱弁を文学部の学生が聞いていても他人事なんです。それが人で横につながっていないといけない。そういう流れになると思います。

そこに書いておきましたように、「分野・学部等毎の自校教育」＋「全学的教育」というのがそれです。この全学的教育の中の筋になるのが学長による講演だと思います。これは学生が期待します。学長が来て講義をしてくれるというのは、どの学部の学生も一応非常に強い関心を持ってくれます。

2 番目には、愛校心ではなく「帰属感」と「敬意」が育つと書いておきました。学生諸君が自校教育を受けることで何を認識するかということです。私の知っているところ、今申したように、まず知識を知りたいのです。愛校心というよりは知識を知りたい。私がもし立教で愛校心を養いたかったら講義などしません。全員を神宮に連れて行きます。神宮に連れて行って法政との試合を見せたりするほうがよっぽど愛校心が沸きます。

ところが、講義でやるべきことは違います。そういうものとは違って、むしろ彼らは今言ったように、うちの文学部とよその大学の文学部とはどこが違い、うちの強みはどこにあるのかということが知りたいのです。そういうことが、つまり知識です。結果的にそういうことが彼らの愛校心を一番育てることになると思います。

レジュメには書きませんでしたが、この準備のためにいろいろな資料を読み返しておりましたら、一つ、皆さんご承知かもしれませんが、先ほど申し上げました京都大学の文書館の責任者をなさっている西山伸先生がおられます。その先生が書かれた全学共通科目、「京都大学の歴史」の実践という実践報告がございます。これを改めて読んでい

たら、皆さん方にご紹介したくなりました。

先生はご自分の京都大学のことについて、半年間の講義を組み立てておられます。それは歴史的なイベント。イベントというのはできごと。そのできごとの中の一番激しいできごとを採り上げておられます。京都大学の歴史ではキャンパスの歴史は当然で、京都大学の創立というのも扱っておられます。次が滝川事件。昭和の初めの法学部の事件で、大学自治に関する事件です。それから、戦争と大学。京都大学の「協力」の諸相。それからその次が、出征する学生たち（1)、(2)。これはいわゆる学徒出陣の問題です。それから、敗戦と新制京都大学の発足。50 年代、60 年代の大学と学生というふうにきて、ハイライトが大学紛争とその背景。これは 2 回にわたる構成です。ここでしっかり書いて、それから最後は紛争後の大学というので終わりです。最後にまとめ。こういうことをトピック的なテーマで設定しておられる。

西山先生の話によると、学生諸君が一番関心を持つのは戦争と紛争なんだそうです。戦争のときに、うちの大学は何をしたか。紛争というのは何だったのか。これを一番知りたがるというのです。西山先生はそれを実践しておられる。それに対するいろいろな考察が述べてありますが、一つおもしろいのは、西山先生がそういう大学についての講義は何教育だろうかと考えておられることです。西山先生のご意見だと、これは日本の近現代史ではないとおっしゃっています。西山先生は日本史の出身で、明治以降の外交史が専門なんですよね。ですから、定めし、これは日本史の一部だとおっしゃるかと思ったら違いました。

西山先生はこういう自校教育は疑いもなく教養教育だとおっしゃっています。僕も同じです。学生たちが獲得すべきリベラルアーツの一部である。僕がそれに加えられるものがあるとすれば、一つだけ加えることができる。それはどういうことかというと、自校教育を受けることによって学生たちは自己を知るのです。自分を知る。知るということはどういうことかというと、高遠な理想をもとに何かを考えているのではなくて、私が今、座っているところはどういうところなのか。俺はどうしてここに座っているのか。それがわかる。つまり居場所がわかるということです。居場所がわかるということは、すなわち自分がわかるということです。ご承知のように、自分とは何かを知ることは教養の第一歩ですね。教養の基礎です。明らかに自校教育は歴史教育の一部ではなく、学生にとっての教養教育の一部だと思っていいと私は思っております。

西山先生がたくさんの学生の感想を紹介しておられます。こちらにこれをお預けしておきますので、あとでご用意なさっておいたらいいのではないかと、ご参考になるのではないかと思います。相当おもしろいです。

これを見ますと、学生たちはこういうことを感じています。特に彼らの紛争に関しての感想を西山先生はここに挙げておられます。

例えばある学生。歴史を理解するのにどうして名もない学生の手記や、会話の文章が資料に必要なのか、最初は不思議でしたが、できごとの連続として大ざっぱに語られる歴史の裏に隠された、そういう名もない人々の生の声が、実は大きな歴史の流れや原動力を理解するのに必要な情報だと授業を通じて感じましたと。農学部の学生の記録です。

たいへん学生の感想が高度なんですね。別の学生は、ほかの授業が妙に堅苦しい内容だったり、先生の訳文から哲学を聞かされるのに比べて、この授業では毎回毎回、当時の人のぎりぎりトークを読めてわくわくした。今まで習ってきたものはきれいなことばかりだったけど、この授業は当時の日記とか、独特のライブ感があったり、今だから言えることや普通では見られない資料など、当時の人の心情に引きつけられる小説のような授業でしたと。そう言っているのは文学部の学生です。

その他、たいへん高度で素直な感想がいっぱい返ってきています。先輩から進められて何となく取った授業でしたけれども、週の中で本当に楽しみな授業でした。私が勝手に想像していただけかもしれませんが、授業を聞くと正しいことって何だとか、人はどうあるべきなんだみたいな京大の歴史とはあまり関係ないことまで考え込んでしまいました。これは教養教育ですね。教育学部の学生です。

京都大学に入ってくるような思考性のある学生でも、つまり逆に、世の中で京都大学をいい大学だという情報はあふれていますが、それを選んで入ってきたはずの学生ですら、やはり京都大学において先輩たちはどう生きたかを知ることはたいへん大事なことなんですね。逆に言うと、彼らは入るまでそれがわからないということです。同じ講義を東大の学生が聞いたら別の感想を持つでしょう。しかし、京都大学の学生が京都大学でそれを聞いた。その京都大学における自分の位置を知った。これで彼らは安心をするのです。

それから、僕は学生とあちこちでそういう自校教育をやりました。桜美林でもやったことがございます。それから、立教にまた帰ってきてやったこともございます。いろいろやってみてわかったのは、学生たちは自校教育を聞いて満足したわけではないということです。満足というのはどういうときに現れるかというと、飢餓感があるとき、飢えていたときにそれが与えられると満足します。しかし、僕に言わせると、学生たちは飢えているわけではないのです。知りたいと思っているわけではないのです。ですから、そこに与えられて起きてくるものは何かというと、私に言わせれば満足感ではなく安堵感です。安堵するのです。「ああ、私はこういうところにいるんだ」という、この安堵感は非常に大事なものでございます。安堵感が生まれるからこそ、大学の中で落ち着いて勉強しようという気になってくれると思います。

効果についての 3 番目に移ります。3 番目はウラオモテなく講義をする必要があるということです。これは同化すると非常に難しいことで、大学にはいろいろ裏があるでしょう。それをしゃべりたくないときもあります。しかし、しゃべらないと話が通らないこともいっぱいあるわけです。

具体的な例でいいますと、日本の大学の汚れた部分といいますか、それを表している代表的な例の一つは九州大学の例の生態解剖事件です。医学部の教授たちが戦時中に、敗戦間際のころにやった、あのアメリカ人捕虜の生態解剖事件。あれなどはたいへんな事件で、長い間、九大の歴史の中でも十分には触れられてきませんでした。しかし、最近、それは「九州大学生体解剖事件」という本になって岩波から出まして、公になりました。

立教では 1970 年代の初めに起きた一大セクハラ事件がございました。ちょうど僕は 1974 年から立教大学の教員になったのですが、その前の年の夏に起きた事件です。ご存じの方はもう少ないかもしれませんが、石廊崎の崖の上から子ども二人と奥さんを連れて投身自殺をした大学の助教授の事件です。立教大学の英語の助教授でした。

その彼がなぜ 7 月にそういうことをしたかというと、どうやら教え子を殺したらしいけれども、本当に殺したのか、どうなったのか、教え子の死体が出てこないからわからない。本人は遺書も残していないということで、結局なぞのまま 8 月が終わり、9 月になってやっと死体が発見されたのです。それでやはり殺人事件だとわかって、夏中いろいろなメディアが立教に取材に来ました。僕らが夏休みにちょっと行ってみても、すでに取材を受けている先生方がいると。亡くなった、その一家心中をした先生のお友達たちが次々に取材を受けたわけです。わからないまま、やっと遺体の発見で決着が付いた大事件ですよね。あの大事件のことなどは 70 年代の立教を考えると本当はしゃべらざるを得ないのですが、しゃべっていいのかなと僕はずいぶん迷いました。学生たちの 3 分の 2 は女子学生ですから、そこでしゃべって、「私はこんな大学は嫌だ」「こんなつもりではなかった」「辞めます」なんて言われたらちょっと困るなと思っていました。

しかし、僕はあえて語りました。それが他人事ではなかったからです。どうして他人事ではなかったかというと、私が 74 年の春に立教に行くことが決まったときに、そのことを友達に言いますと、「ああ、それはよかったな」と言った口の下から、「ところで、どうして決まったんだ？」と必ず聞くんですよね。「いや、実はあの事件で一つポストが空いたからね」と私が冗談で言いますと、みんな本気にして、「よかったな。そうだったのか」と。それぐらい有名な事件でした。

そういうところで、それをしゃべったら、学生たちはたいへん納得いたしました。一番大事だったのは、そのあとで立教大学の各学部教授会がその事件に関してそれぞれの詳しい答申を書いて、それを大学全体で一つの報告書とし

てまとめて公開したことです。そこまでをきちんとしゃべっておくと、彼らは安心いたします。

立教のもう一つの傷は、敗戦直後、マッカーサーから 11 人の管理職者が追放された事件でございます。戦時中における戦争への協力、積極的協力を軍部にしてしまったので、これが戦後問題になって、全国大学のトップを飾って 11 人が直接指令でパージされました。その話もきちんとやりました。そういうことをやると、学生たちはますます安心いたしました。ですから、僕はそういうリスクロージャーが極めて大事なことだとわかりました。そこをクローズしてしまってはいけないのです。隠してはいけないのです。リスクロージャーこそ実は自校教育の中で最も大事なものです。自分はそのことをどう考えているかということをきちんと言っていい。あるいは、自分はどのようにそのことと関わっているかということを、やっていったほうがいいと思います。

Ⅲ番目の柱に移ります。Ⅲ番目はアーカイブズの建設と自校教育の意義を、今の大学の課題との関わりから申し上げてみたいと思います。

一つは大学の責任を明示することです。これはたいへん大事なことです。特にこれから個別の大学でとりわけ重視すべきは何かというと、一つはうちの大学が行ってきた学術研究が日本の学術研究の中のどこに位置するかをはっきり沿革書の中に出すことだと思います。「○○大学 100 年史」というものがもし出るとしたら、その中にとにかくがんばって出しておくべきは、うちの大学の学術は日本の大学の学術のどこに貢献しているか。ほかの大学が軽視している○○学をうちでは特に重視しているとか、それから同じ○○学でもこの分野のところでうちは一番貢献してきたということを思い切って出すべきだと思います。それが一つ目です。

二つ目は新しい人材への要請です。よくこのごろ、新しい学部をいっぱいつくりますが、どういう人材ニーズに基づいてわれわれはこの学部をつくったかをきちんと論証すべきだと思います。東大の場合はこれをやりました。幸い、そのことに極めて熱心な専門委員がおりまして、その人が一人で受け持って、卒業生は主にどこへ行ったか、行ったあとでどういう動向を示したかということをきちんと調べました。そういうことをやりますと、大学に対する誤解を解くこともできるのです。

東大は官僚養成の大学だと言われてきたのですが、全学を見ると別に官僚だけを養成しているわけでは全くなくて、たくさんの教員を養成しています。特に数学のような分野。この分野の教員をいっぱい出しているのは東大です。戦前でいうと中学校の先生、戦後でいえば高等学校ですが、戦後はほとんど教育界に行かなくなりました。むしろ学会のほうに行くようになりました。学会や会社の研究所へ行くようになったのですが、戦前は違います。数学の専攻者などはいっぱい中学校の先生になって活躍いたしました。同じ法学部でも、例えば官庁に入ったのは限られておりまして、むしろそれよりは、例えば司法官、司法畑に行った人たちも非常に多かったのです。経済学部ができたころになると、もはや経済官僚ではなくて、むしろ実業界に、特に大企業に次々入っていくことがわかってきました。これは大事なことでして、きちんとやらなくてはいけないことだと思います。

それから 2 番目の「大学の個性と独自性を分かち持つ最良の方策」はこの年史をつくることです。いい年史をつくるというのは極めて大事な作業になってきます。ヨーロッパやアメリカなどの大学は編纂の水準が非常に高いのです。僕らは今、やっとそれをきちんと消化する段階に達しました。かつては大学の沿革史なんて、○○大学 100 年史なんていうと物好きのやることだったのです。記念式典のときにもらう、やたらに重い、あとでだれも読まない本が沿革史でした。

ところが、今はそれではすまなくなってきました。中身に何が書いてあるか。これをきちんと見る時代になってきました。まさにアカウンタビリティです。

3 番目は特に自校教育のほうですが、教職協働のまたとないチャンスなのです。これはとても大事なことです。例えば、自校教育を一人でやるのは絶対に無理です。私は 97 年に前期は 2 時間、後期は 3 時間やったのですが、4 時間ぐらいはできますね。ところが、それ以上になると半年を一人でというのは相当な無理があります。西山先生は若

いからよくやったと思います。私は今「やれ」と言われたらできません。できないどころか効果がなくなります。

一番大事なのは、自校教育というのは基本的に多人数で分担すべきだと私は思います。例えば、学内でうちの卒業生は企業からどのように迎えられているか。あるいはどういう点が足りないと思われているか。あるいはどういう企業が一番うちの学生たちを迎え入れるのに熱心であるか。こういうことをよく知っているのはだれか。それは教員では絶対ありません。職員の方、特にキャリアの職員の方です。一番大事なそういう情報はその方しか知らないのです。そういう方に何々大学における、うちの大学におけるキャリアの一番のポイントを話してもらえばいいのです。

図書館。うちの大学の図書館は何が特徴か。よそと比べると蔵書の数はどうなっているか。どういう分野に一番強い？譜が集まっているか。それから、うちの学生たちが閲覧に来て、図書館の使い方においてどういう特徴があるか。今後どういうことに力を入れてわれわれは働いたらよいか。こういうことをしゃべれるのは図書館の職員の方たちです。

その他、学生生活について、それからアルバイトと学生生活の関係について考えていけば、学生たちが一番知りたいこと、それからやがて学習に関して学生たちに忠告や援助をするアカデミック・アドバイジングというようなこともこれから必要になってくるでしょう。そういうことを学生諸君に説得力を持って話せるのは職員の方です。

卒業生の中で一番活躍している人はだれか。地味だけれども、これこれこういうような NPO を立ち上げて、その世話をしているこういう方がおられるけど、あなたたちは知っているか。そういうことを教えるのも極めて大事なことです。ところが、それが卒業生のだれかということを知っているのは残念ながら教員ではございません。これも職員の方です。職員の方、特に学生部の人とか、キャリアの方などはよく知っていることです。そういう方に斡旋をお願いするのは大事なことなのです。

その他、いっぱい学生たちを軸に考えると、その周りで教員の手の届かない、お世話をする部分はいっぱいあります。自校教育はそれをやればいいのです。それは学生にとってのたいへん大事な大学への適用教育といわれますが、適用だけではなくて大学を活用する経験になると思います。

そういうことで、特にアーカイブズの建設といい沿革書をつくることと、そして自校教育と、この三つの関係が非常に深いということを私は強調しておきたいと思います。

さて、そろそろあとのほうになりますが、一番申し上げたかったことは、二つのことをお願いいたしたいと思います。一つはさきほど申しました学生たちが特に興味を持つトピックです。これはやはり私の経験からも戦争と紛争と、それから大学の関係だと思います。この二つはとても大事で、僕の経験から戦争に関して言いますと、学生たちは現象を知っているだけで、自分がいるこの大学と関係があったということは、まず、普通意識していません。そういう関心すらありません。むしろきちんとそういうことを教えると、彼らは納得します。『きけわだつみのこえ』のような、学徒出身の、学生出身の兵隊の心情をどういうふうに読むかなんていうことについては、どの大学でもたいへん深い関心を学生たちは持つようになります。つまり、ここは事実のきちんとし享受と知識の享受と、それからその解説がとても大事な分野です。

それに比べて紛争のほうは、彼らはたいへん強い関心を持っています。というのは、よくわからないからです。時々親たちが「紛争のころは」なんて言ったりします。それから時々ニュースで浅間山荘事件なんていうのが出てくる。それから、東京大学の安田講堂にこんな噴水が何本もかかって、どうやら攻められているのがわかる。ああいうのを見ると、「あれ、何だっただろう？」と思うのです。おもしろそうだと、彼らは一般的関心を持っているのです。

ところが、何だったかになるといよいよわからない。僕は桜美林で一遍、学生たちから「なぜ紛争をしたのか、教えてほしい」と言われたから、一般教育の授業で 2 時間かけて教えました。図版や写真、ニュースなんかを全部見せてやりました。これは絶望的なまでのリスコミュニケーションでした。学生たちが鉢巻きをしているのです。口にこうやって、みんなほおかむりをしている。それが何のことかわからないのです。それから、頭にヘルメットをかぶっ

ているでしょう。そして棒を持っている。「これからどこかに建築に行くんですか？」と言うんです。「違うんだよ」と言ってもわからないんですね。「どうしてほおかむりをしているか、わかる？」。これも全然わからない。いやあ、これは一から説明がいるんだと思いました。

そして、学生の主張だけを聞かせておきますと、感想文に載ってくるのはこういう感想が一番多かったです。私はあの先輩たちを尊敬します。なぜか。われわれはなぜ研究をしているのか、先生たちはなぜ学問をしているのか。真剣にそういうことを問うているからです。彼らは真面目に勉強したいと思っていたんだと思います。僕らはそれに比べて全くなまけものです。本当に恥ずかしかった。そういうふうに書いてきます。それは当たらない感想ではないんですよね。確かに当たらない感想ではないけれども、それだけが感想だといわれると、ちょっと中学生じゃないでしょうと言いたくなる。

つまり、彼らにとってみると紛争というのは関心があるけれども、何だったかわからないという不可知な領域の事柄なんですね。そういうことで、とてもこの二つは採り上げ方がおもしろいと思います。採り上げ方によって違ってくると思います。

2 番目は同種同類系、同分野の大学・学部との対比。自校の特色を明らかにする。先ほど申し上げてしまいました。これは非常に重要なことで、これがあると、逆におもしろいことに、自校教育を一遍本気でやると、その大学の先生、やっている先生やその学部の先生たちの FD になるということです。FD の一環として使えるということです。先生方はそれをわかっておられないことがうんと多いですね。自分はどこどこで働いていると思っていらっしゃるけれども、うちの特色は何なんだ。この学部の特色はどれだ、学科の特色は何なんだということになると案外真面目に考えておられないことが多い。それが改めてわかるということです。ですから、本格的にいうと、先生方における FD のチャンスになっていくと思います。

3 番目。特に東大の学生たちはほとんどこれを思っていませんでしたけれども、立教と桜美林の学生たちは、特に桜美林の学生たちは強くこのことを訴えました。この大学は消えるのかということです。彼らは大学全体が危ないというのはよくわかっています。ですから、自分が卒業したあと、もし私が家庭を持って、子どもに「お母さんはどこの大学を出たの？」聞かれたときに、「〇〇大学を出たのよ。でも、今はなくなってしまったけど」と言わないでいいようにしてほしいと。これが強かったです。その考え方は本音のところでは非常に強いです。ですから、これには答える必要があります。

私はその当時、学生たちにこういう提案をいたしました。4 時間ぐらい自校教育をやったあとで、あなたたちに今度の時間を全部あげるから学長に手紙を書きなさいと言ったのです。学長宛ての手紙。「学長は覚えているでしょう？」と言ったけれども、顔を見ていたら覚えていないことがわかりました。学生にとってみると、入学式のときに遠いところで講演をしたあの方なんですね。ですから、その次の時間に僕は学長室に行って、秘書の人に頼んで、悪いけど佐藤学長の大きな写真が額縁に入っていないかしら。ちゃんと入っていましたから、それを持ってきて、黒板にかけて、「この人だよ、思い出した？」と。この方に手紙を書きなさい。僕が責任をもってその中のいくつかを選んで取り次ぐと言っておきました。

そうしたら、学生たちはよく書きましたね。本当によく書きました。学長への手紙というものですけど。いろいろなことを書きました。それには、購買の話、桜美林大学における将来の理想とか、いろいろそういうのも書いてあったけれども、その中のいくつかは今言ったように、「どうぞ私の子どもたちに、うちの大学はちゃんとがんばっていると言えるようにしてください」。要はつぶれないようにしてほしいということですね。

もう一つは、スクールバスの終わる時間をもっと降ろしてほしいと。それから、食堂の献立が全然まず過ぎるからやめてくれ。そういうのもありました。別の言葉で言うと、そういうことを学生たちが言うというのは、彼らに参加の志が生まれたということなんです。この学校に自分も意見を言うことができるという参加の志が生まれた。これは

すごく大事なことだと思います。自校教育の効果の一つがそれなんです。参加の志を培うことができるということです。

最後に、もう一つ申し上げたいと思います。それは先ほどから申し上げているように、学生が大学のことを知らないことをどうしたらよいかということです。これはアメリカと日本の違いを考えてみると、割によくわかってまいります。

アメリカとはだいたいシステムが違うのです。個別大学が試験をするわけではありません。個別大学は、選考はするけれども、日本のように入学試験をやるわけではありません。そして、個別の大学は専ら日本で言えばAO入試に近いような、作文ぐらいは出させるけれども、高校のときの勉強、本人のキャリア、その他を中心にやる。その代わり、いわゆる共通テストは2種類ぐらいをきちんと受けさせることをやります。アメリカは個別大学入試なし。しかし、共通試験はありというシステムです。

日本は逆です。共通試験もあり、個別入試もあり。今、その個別入試のところが問題になっています。そういうわけで、もともとシステムが違うのですが、その違いは何によって生まれているかというと、それは高校生たちが大学のことを非常によく知っているということです。これは彼らが高校における、いわゆる進路指導の中でしっかり聞かされることでもあるわけです。

高校における進路指導の丁寧さというのは、アメリカの場合はたいへんなものでございます。そもそも高校において、日本のような定期試験とか中間試験というのはありません。各科目の先生がそれぞれに自分の方法で試験をやるわけです。しかもその試験はほとんどが、いわゆる日本でいうレポート方式です。ペーパーによる、丸を付けるなんていう、マルチプルチョイスなんていうことは全然ない。そういう試験ですから、高校においての進路指導が丁寧であるだけでなくて、大学が今度は丁寧なんですね。

私の例で申し上げますと、個人的な例で恐縮ですが、私の甥は幼稚園からアメリカで育ちました。全部アメリカで小中高を過ごして、大学はアメリカの学校へ進みました。そのときに、高3になった年の夏休みに我が家に2カ月滞在したのです。彼は日常の言葉はほとんど英語でございますが、一生懸命日本で「おじさん、おじさん」と話をしました。

うちにいた間に彼がやったことは何かというと、二つでした。一つは教養書を読むことです。アメリカから持ってきているスーツケースがあったのですが、それにぎっしり入った本を読むと、全部、日本でいう専門書や教養書でございました。リンゲスティックスという言語学関係の本があるかと思えば、その隣にアメリカンヒストリーと何とかがある。あるいはその他にエッセイが入っているとか、いろいろある。「おまえ、これはどうしたんだ？」と言ったら、「いや、大学で君は読書の範囲が狭すぎる」と言われたので、それで持ってきたんだと。一冊も問題集とか参考書はありません。高3のときの夏休みですからね。日本で言えば今度高3を迎える春休みです。ですから、あと1年で試験でしょう。日本であれば、2カ月もうちを離れるなら、絶対に参考書を持っていきますよ。しかし、彼はそういうのを一切持ってきていません。そういうものは必要ないのです。日本で勉強する必要はないと。

それからもう一つ。彼が必死で探したのはボランディアの経験でした。何でもいいからボランディアの経験がほしい。「どうしてだ？」と聞いたら、これも大学で言われた。あなたは何もボランティアをやっていないじゃないかと。そういうのが必要だと。

どこの大学を受けるんだと言ったら、「ハーバードだ」と言うんです。「そうか、ハーバードか。アメリカには千何百という大学があるのに、ハーバードだけが大学じゃないぞ」と言ったら、「でも、親がそう言うから」と。「お父さんやお母さんはハーバードしか知らないんだ。大学はハーバードしかないと思っているからだ。本当はいっぱい大学はあるんだぞ」と言いました。彼は最後までハーバードを一応狙ったらしいのですが、落ちまして、ジョンズ・ホプキンスというところに入りました。これもいい大学だから、「よかった、よかった」と言って、たいへんよかったのですが、あの夏のころの彼の様子を見ていると、いかに自分の進路に関して熟知しているか。それから行くべき大学

に関してどのくらいのことを知っているか。これには驚かされました。とても、とても違う。

今、中教審で、高校、大学の高大連携といっています。それで大きく試験内容も変える。2020 年にはこういう問題が出るという新書まで出ています。ああいう大変化がありうると思いますが、問題は試験のやり方を変えるよりは、むしろ学校のそういう点での指導、このガイダンスの仕方をもっと質的に変えていく必要が僕はあると思います。そうしないと、とても立教の学生たちが見せてくれたような、ああいう大学に関する無知はなかなか救えないだろうと思います。いくら受験雑誌が特集を組んで、学部、学科の内容とかいろいろやっても、僕はもう少し違うコミュニケーションの仕方を確立しておかないと駄目だろうと思います。それがアメリカと日本とは大きく違う。学ぶべき点がうんとあると思います。

3 番目は、究極において学生たちにわかってもらいたいことです。特に自校教育のことに力を入れて申しますと、私は大学というのはいいところばかりの場所じゃないということをはっきり知らせるべきだと思います。それを知らせてこそ初めて学生たちは大学の中のいいところもわかってくれると思います。

例えば、大学はいろいろな恥ずかしいことを犯してきました。しかし、この大学の中の恥ずかしいことに関して、今までこういう形でわれわれは克服しようとしてきた。これはいうなれば大学イノベーションの歴史です。それから、従来の在り方が駄目だとわかったので、大学の在り方をみんな変えてきた。大学改革の歴史です。イノベーションの歴史、それから改革の歴史をきちんと教える必要があると思います。

そのうえで、学生たちに本当にわかってもらいたいことは何かというと、それはその中で先輩たちが一つひとつ価値を積み上げてきたということだと思います。一つひとつ先輩たちが価値を積み上げて、いい図書館をつくり、いい環境をつくり、そして学生たちがいろいろなところから集まるように努力をして、今日があると。今日のこの大学はできた。あなたたちはその一員なんだということをわからせる。つまり、積上げてきた価値というものの所在をきちんと知らせることだと思います。それをやって初めて学生たちは落ち着くと思います。

数年前、私が立教におりましたころ、教職課程の事務室で、そこの係の方が僕に話してくれました。先生、この間、文学部教育学科の大学院の女子学生がここへ来て言ってました。その子は大学院の学生だったそうですが、「あなたはどうして大学院まで行ったの？」と私が言ったら、「自分は 1 年生のときに寺﨑先生の授業を受けて、この大学がとてもいいと思うようになった。それでずっと勉強したくなって、ここで勉強しているんです。とてもよかったと思う。今は大学院の 1 年生で、しかもその中で特別の専修免許状を取ろうと思ってがんばっている」というのです。「ああ、よかったね」と。その学生にぜひ一遍会わせてほしいと僕は言っていたのですが、学生のほうが、「いや、恥ずかしいから、私は今はちょっと会いません」と言っていたというので、しかたがないと。よその学科の学生だしと思って諦めたのですけどね。

大学は恥ずかしいことを言おうとすると、いっぱい出てくるわけです。一番大きい恥ずかしいことは何かというと、例えばラテンアメリカのある国の国立大学。これがいつできたかはわかっているのですが、開校する 2 年ぐらい前から、その大学が学位を出したというのがわかっているのです。それはおかしいことでしょう。開いてもいないのに学位を出す。結局、それは宗主国といいますか、その国を開いていった、いわゆる植民地にした国の連中が、金は手に入るし、食糧も豊かでいい。あと、残るのは名誉だけだと。その名誉の一番いいのは博士号だと。ドクター号だけをほしがって、それに応じたということです。非常におかしい話ですが、事実そうなんです。

ですから、小さい大学、弱い大学にいらっしゃる大学の先生方は、「先生、私はうちの大学は建設業者が始めてつくった、まだ 20 年にしかならない大学です」とおっしゃるのです。「だから、とても自校教育なんて 3 時間でやるのが精一杯で、あと話すことはないと思います。どうしたらいいですか」とおっしゃるのですが、私はその方に申し上げました。

大学というのはそんなすばらしいところではないというのはよくわかっています。例え話をするのはハーバードで

す。ジョン・ハーバードという無名青年のもとに突然遺産がころがりこんできた。どうするか。じゃあ、とにかく大学でもつくるかというのでつくったのがハーバード大学なんです。ですから、最初は非常にみじめな出発をいたしました。

スタンフォード大学もすごい大学のように思いますが、スタンフォードは西部開拓にのっかって鉄道をつくっていったスタンフォードファミリーが、とにかくあり余る金を使ってつくった大学です。そこが繁栄して、今は西のハーバードと言われているわけです。そのようにどの大学も初めはどうしようもないのです。東大だって、二つの各種学校が一緒になってつくったのが東京大学で、何の理念もなくできたんですよと申します。

たとえ今、先生のいらっしゃる大学を建設業界の人がつくったにしても、そこで20年建っている。一番大事なことは、先生がなぜそういう大学で教えていらっしゃるのかを学生たちにきちんとおっしゃることですと。そうすると、20年間の間に学生諸君がどう変わったか、どこがこの大学で努力してよくなったか、自分はなぜそこで勤めているのかということが先生はちゃんとおっしゃれるはずだと。それをおっしゃると、学生たちは安心するんですと。先生がここにおられる理由を知りたがっているのですよと申し上げますね。そういうことをきちんと言えるためにも大学史が必要だ。最近、僕は今日いただきましたこの二つのテーマがそれぞれに深く関係しているんだということがわかってきて、たいへんその点で今日のテーマはありがたかったと思います。

それでは、どうも長い間、ありがとうございました。（拍手）

百木　寺﨑先生、ありがとうございました。せっかくの場です。お時間もそうはないのですが、先生はおそらく質問には快くお答えいただける方と存じます。ぜひともどなたか挙手をしていただいて、所属、お名前をおっしゃっていただいたうえで、ご質問をお願い申し上げます。いかがでしょうか。

参加申し込みにもこういう点についてということでご質問も寄せられています。こちらからお伺いしてもよろしいでしょうか。どなたか、いらっしゃいませんか。

寺﨑　先生。もしなければ、私のほうからちょっと追加でよろしゅうございますか。

ご参考のために宣伝をいたします。今日、持ってくればよかったのですが、公益財団法人で野間教育研究所というのがございます。講談社の創設者の名前ですが、その野間教育研究所から最近、『学校沿革史の研究』というのを出しました。大学類型別研究というのです。そういう題の本を出しました。公益財団法人野間研究所です。それでお引きになると、すぐホームページが出てきます。

そこで最近出た紀要としてそういうのがありまして、先ほど申しました西山先生やその他の先生とご一緒に大学沿革史を横に見た分析をしたのが2種類出ています。一昨年出たのが大学沿革史の研究、やはり学校沿革史の研究で、今、副題はちょっと出てきませんが、2種類ございまして、その2種類とおっしゃるとすぐわかります。電話でもいいから依頼されたらいかがでしょうか。特に国立大学は全部にわたってやりましたし、例えば私は宗教系大学だけに絞って横に見ました。おそらく先生方、あるいは職員の方が先生方にお勧めになってもいいと思います。7000円ぐらいで少し高いのですが、ぜひ。特にあとのほうは出たばかりでして、私もぜひ読んでいただきたいと思っております。それをご覧になると、どれほど今、各大学が何年史というのに努力しておられるかがよくおわかりになると思います。以上です。

百木　ありがとうございます。さあ、ご質問、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

矢部[※4]　信州大学の矢部と申します。私、高等教育研究センターというところにおりまして、学生の教育だけではなくて、SDやFDも担当しておりまして、この自校教育をやると特に国立大学の場合は教員も職員もそこの大学を卒業した方があまり多くないというのがあります。そこら辺で教職員に対する自校教育というのがどれほどやるべき

※4　矢部正之　信州大学高等教育研究センター　教授

なのか。あるいは先生がおっしゃったように、教員だったらそこになくても、自分がここで教えている意味というのが言えると思うのですが、そこら辺を取り組んでいる大学があるのかどうかというのをちょっと教えていただきたいのですが。

寺﨑　対教員と対職員とでだいぶ違うと思います。対教員の場合は、極端な言い方をすると、うちの大学の特色がどうであって、歴史がどうであるというのを知らないでもやっていける部分があります。ところが、その教員もいざ、例えば管理職に就いたり、小さな意味でのグループの指導をやる立場になったりしてしまうと、これは大学全体のことをわかっていないと身動きがとれません。非常に必要になってきます。だから、不必要というわけでは絶対にない。私はあったほうがいいと思います。

絶対に必要なのは、職員の方です。これは持ってほしい。僕が思いますのに、職員の指導は SD と言われていますね。SD については三つのリテラシーがあるといっています。第 1 番目のリテラシーは、大学というものについての特質の理解です。例えば、会社とどこが違うのか。官庁とどこが違うのか。それから工場とどこが違うのか。そういうほかの組織と大学の組織上の違いです。これは職員の方については第一に知っておいてもらいたいリテラシーだと思います。

私はかつて桜美林大学で大学の現職職員の方の修士課程の教授をいたしました。今日もお一人、そのときの学生さんがお見えになっているようですが、そのとき 1 年間付き合ってやっとわかりました。僕らは愚かにも現職の大学の職員の方が大学院に来られる理由は何か。愚かにもどうやったら学生を集めることができるかとか、どうやったら大学経費を安く上げることができるか、そういうスキルを知りたいと思って来ているのだと思っていました。しかし、それは当たっていなくはないけれども、全部当たっているわけではないというのが非常によくわかりました。来られる方たちが実は知りたいと思っているのは、大学という組織の本質です。特色、特質です。やっとそのことがわかってまいりました。それが第一のリテラシーです。

リテラシーの 2 番目は自校に関する知識だと思います。これは自校教育でやるべきことです。学生や職員の方たちにも、僕は立教で毎年、新人職員の方にこの講義をやってまいりました。立教とは何か。そうすると、いろいろ知っているはずの新人職員の人たちだって立教に関して何も知らないですよ。それが非常によくわかりました。これが 2 番目です。

第 3 のリテラシーは政策研究です。ポリシーはどう進んでいるか。これは特に大学高等教育に関するポリシー。この三つです。第 1 番目が大学の特質、2 番目が自校に関する知識、それから 3 番目がポリシーの理解。この三つがどうしても職員の方にとっては必要だと思います。特に職員の方にとって大事なのは 2 番目です。2 番目の立教に関する知識を持ってほしいと思います。そういうことでございます。

百木　ほかの方、いかがでしょうか。

星野[※5]　明星の理工学部の電気の星野と申します。今日はありがとうございました。私の父は立教の出身でございまして、非常に親しみを覚えております。私も電気なので、高校生とか新入生に向かって、なぜ電気はいいのか。君らは電気を選んで正解だよというところまでは教員の中で議論してやっているのですが、なぜ明星がいいのか。ほかの大学の電気ではなくて、なぜ明星の電気がいいのか。これが出ないのです。特に電気はどこでもスイッチを入れれば動くので、どこにでもあるし、文科省が地域に根差したとか言われても、専門の関係からするとあまり根差さなくてもやれるなというところがあって、特に自校の教育はそれに対して、なぜ自分の大学でやるのがいいのか、どういうふうに方向づけたら見つけられるのだろうかいうのを、ちょっと示唆していただければありがたいのですが。

なぜ自分の専門のところを学生が選んだら正解なのかというところまではいく。ほかの大学ではなくて、なぜ明星

※5　星野勉　明星大学理工学部　教授

大学なのか。そこがつくれない。

寺﨑　なるほどですね。

星野　それをどういうふうに方向づけたら見つけていくことができるのかということです。

寺﨑　いきなりそれを論理的に納得させるのは非常にきついと思います。ただ、入って2年か3年たつうちに学生自身がわかる。これはあると思います。ですから、学生の自習、自学の部分にうんと期待することはできると思います。

例えば私の経験で申しますと、私は教育学科の教授でした。初めは立教大学の文学部教育学科の教授になりました。そこは、立教大学文学部教育学科は非常に教育の本質を考える。つまり教育哲学的思考の強い学部でしたが、同時に教育実践、特に教育実習の指導に非常に力を入れました。言い換えますと、教育実践と教育の理論的研究。この間のダイナミックな往復、往還運動を先生たちは文句を言わずにやったのです。そのおかげで、当時はほかの有名大学の大学院に行く学生よりも、うちに来る学生のほうがずっと多かったのです。うちに来て合格したら、よそに合格していてもそれを振って来るという状態でございました。

ですから、あのころは教育の実践と理論の両方を深めたいと思ったら、やはり立教に来るほうがいいとわれわれも言っていましたし、本人たちも来てすぐわかりました。そういうわけで、大学院ですからそれがわかるのです。学部のほうだとかなり難しいです。やはり一応は偏差値で選んで入ったところがたまたまよかったとなって、入った学生たちが今度は「うちはすごいぞ」とよそへ言って、よその人たちがわかってくれる。そのくらいじゃないでしょうかね。残念ながらいい沿革史が出ていると、その足跡がパッとわかるのです。それがないとものすごくきつい。すみません。あまりこれ、ピンとこない答えになりますけどね。申し訳ありません。

百木　あとは、ご質問、ございますか。それでは、ちょうどお時間となりましたので、質疑応答はこれで終わらせていただきます。最後に明星教育センターの原田センター長よりごあいさつを申し上げます。

原田[※6]　本日は寺﨑先生の貴重なお時間、ありがとうございました。先生のおかげで非常に有意義なお話を聞けたと思っております。

自校史などの研究というのはもっと前からあるのかと思っておりましたら、1970年代からというお話で、大学の古い歴史にしてみれば、ものすごく新しいことだということを改めて知った次第です。なおかつ自分の大学の歴史と、それが自校教育、学生の立ち位置の教育といいますか、自分の座っている位置の確認ということに使われるということ。これは非常に重要なことだと感じました。

本学でも一番最初のDVDなどでご紹介していますように、いろいろな自校教育、学長のお話。ちょうど寺﨑先生のもございましたが、学長講話という形で学長が話す時間というのもございます。まだまだ足りないなあというところがございました。

もう一つ印象に残りましたのが、悪いところといいますか、そういうところも出す、積極的に出すということ。どうも悪いことといいますと、最近はむしろ若い人のほうが○○チャンネルというようなところから情報を得まして、非常にそういう情報は入ってくるのですが、実際に大学はどういうふうなことがあったのかなというのをはっきり教員なり、あるいは職員の口から聞くということも大事だということを痛感いたしました。

今回、明星教育センターでやっている「自立と体験」という自校教育の一つ、「自立体験1」という、1年生に対して行っている自校教育もございますが、その中で先生のお話をいかして、4月以降も実践してまいりたいと存じます。

他校から来ていただきました先生方、このお寒い中、来ていただきましてありがとうございました。明星大学50年。先ほど副学長のほうから紹介がございました、50年、51年の歴史でございますが、その歴史につきまして、本校の自校史といいますか、50年の歴史というものを資料図書館で展示してございます。立派なところから比べますとや

※6　原田久志　明星大学理工学部　教授

や見劣りするかもしれませんが、われわれ一生懸命つくっているものでございますので、ぜひご覧いただきたいと存じます。

本日は本当にありがとうございました。今後も自校教育ということで明星大学も取り組んでまいりますので、何らかのこういう機会がまたございましたら、その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。

百木　どうもありがとうございました。寺崎先生には今日は自校史ということでお話をいただきました。今、FD が全国で盛んですが、本当の FD のさまざまな場で講師としてわれわれにいろいろな意味でのご示唆をいただきました。先生はまだまだお元気でご活躍、これからまたわれわれにいろいろお教えいただかなければならないところですので、今日の講演会のお礼の意を込めまして、もう一度盛大な拍手で感謝の意を表したいと存じます。よろしくお願申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

【講演会の様子】

明星教育センター自校教育講座 講演会 次第

2016 年 3 月 11 日（金）
14:30～16:30
明星大学 日野校 28 号館 204 教室

1 開会あいさつ

2 講師紹介

3 講演
演題：自校史研究と自校教育の実践について―なぜ今、自校教育が必要か―

講師：東京大学・立教大学・桜美林大学名誉教授 寺﨑 昌男氏

5 質疑応答

6 閉会あいさつ

寺﨑昌男（てらさき・まさお）氏プロフィール

東京大学・立教大学・桜美林大学名誉教授 教育学博士
1932（昭和 7）年福岡県久留米市に生まれる。東京大学大学院を経て財団法人野間教育研究所、立教大学文学部、東京大学教育学部、桜美林大学大学院等で教鞭をとった。この間、東京大学では学部附属中高等学校校長、百年史編集委員会委員長を、立教大学では全学共通カリキュラム運営センター部長を、桜美林大学院では大学アドミニストレーション専攻修士課程主任等を歴任し、日本の大学教育に関して歴史的・教育学的観点から考察を加えてきた。
学界では日本学術会議会員、教育史学会代表理事、日本教育学会・大学養育学会会長をつとめ、大学教育に関する著作としては「大学教育」（東京大学出版会、1969）「増補版 日本における大学自治制度の成立」（評論社、2000）「大学改革 その先を読む」（東信堂、2008）「東京大学の歴史」（講談社学術文庫、2008 年）「大学自身の総合力」（東信堂、2010）があり、特に自校教育、大学史料館を取り上げた近著として「大学自らの総合力Ⅱ」（2015 年 11 月、東信堂刊）がある。

明星大学研修会講演要旨 2016311

自校史研究と自校教育の実践

―教職員・学生が自己を見出し、課題を学び、未来を選ぶ―

寺　﨑　昌　男

はじめに

１）　沿革史編纂 ― 立教学院、東京大学、東洋大学、立教学院
大阪女学院、東京芸術大学、大阪女学院、拓殖大学 etc.
２）　自校教育　― 立教大学、桜美林大学、獨協大学、大東文化大学
３）　４０年間　―　二つの事業に投げかけられる新しい要望

Ⅰ　自校史研究の進歩・変わってきたアーカイブズへの期待

1　無知の時期　―　アーカイブズ？　コレクション？　ライブラリー？
2　同志社・早大の例　―　60 年代
3　70～80 年代　―　国立公文書館法、情報公開法、認証機関評価等
―　大学評価の整備によりアーカイブズ準備加速化
4　国立大学法人化(2004)が弾み　―　京都大学が先駆
5　アカウンタビリティーの遂行とアイデンティティーの確認
―　大学の中の全情報の公開が要求される
―　展示の機会の増大　―　展示館の威力

Ⅱ　自校教育

1　最初の体験
1）　アーカイブズを基礎として初めて＜資料の確認＝自校教育内容の確定＞
2）　私の気づき　―　概念だけの押し売りをしているのではないか
97 年春学期　―「全学共通カリキュラム」内の科目履修生たち約 45 名
秋学期　―「文学部総合科目」履修生たち約 70 名
3）　おどろき　―　立教のことを余りに知らない！　そして他校のことも・・
4）　感動　―　いかに新鮮な情報なのか　―　学生諸君の驚きの声

2　効果について

1）　専門分野によって違う　―「分野・学部等毎の自校教育」＋「全学的教育」

2）　愛校心ではなく「帰属感」と「敬意」が育つ　―　学生諸君は何を認識するか　―　積み上げられた価値　―　参加の意識

3）　ウラオモテなく講義する覚悟が要る　―　近年の大学史研究の進歩

Ⅲ　アーカイブズ建設と自校教育の意義　―　現代の大学課題との関わりから

1　大学の責任の明示　―　文化建設のニーズ、新しい人材への要請

2　大学の個性と独自性を分かち持つ最良の方策　―

3　教職協働への貴重なチャンス

Ⅳ　二つの余談

1　学生達が特に興味を持つトピック

1）　戦争と紛争と大学

2）　同種同類型、同分野の大学・学部との対比、自校の特色

3）この大学は消えるのか

2　アメリカと日本の「大学選択」「高大連携」

1）　アメリカに見習って行きたいこと

2）　アメリカと日本とは違う、ということ

3　究極において学生たちに分かってもらいたいこと

自分がこの場所をどう活用できるかを知る

おわりに

ぜひ実践の積み上げを。

以上